

7 de Março de 1924 N.363

日伯新開

（右）日伯新聞類  
（左）毎市エーリヤ・フット  
カイシヤ三七五  
本紙定價  
半ヶ年十ミル  
壹年拾八ミル

がもうい、加減驚いて  
らう、小敵を見て侮る  
を取るものだ、油斷大  
は伊達に教へられたの  
伯國に於ける過去十ヶ  
に於て得たる印象は決  
のではなかつた、そし  
を裏書し熱望を裏切る  
余りに多かつた事を悲  
（伊藤生）

（左）立候補  
（右）公議されん

（左）認を力説  
（右）政府の行動を稱揚

（左）立候補制策  
（右）部落民の議會發言權を  
逐鹿戰場に乗じ出すべ  
五月十日舉行の總選舉  
出さんと目下計畫中な  
候補者あるべく前回の  
体も亦十五名の立候補  
を組織せんと

（左）立候補  
（右）信に遠す

高橋是清氏は愈々高知縣高崎に候補した。農務省獨立計畫、清浦首相は久しく問題となつてゐるが、農務省の獨立を躊躇するべし。それに關する官製豫算案等なるが臨時議會に提出すべく、吉野博士記者就職、東京帝大教授法學博士吉野作之助爲に今回帝大教授を辭任する爲に今後社會問題に自由な意見を發揮する爲に、閣書記官長柳田國男氏と共に聞に入社せり。

知より立好議論は叶	り居れる
一當時のヘロンは稀に見る幾	▲サンバウロは一人ならず
る論究を	は隣に障り方で
作成氏は	は隣に障り方で
田村七太	に朝日新聞で講習中
一千九百七	を云ふ。僕は
一千一百五	へウソにも
一千一百	ないと思つた。
生	▲サンバウロは
レツシユ	みたる所自ら
田村七太	みの獨背では
一千九百七	してゐる。社説
一千一百五	ら確かにうつ
一千一百	も六十以上の
他の人	齡の話は大變
も餘程前	から始る。
行つて大	「天使、あ
である、	てみえる。
が」	「ハイ／＼そ
尊を括つ	うだ
様に理想	「僕は七千
と云つて	だが青柳君
合せない、	てゐる、ツ
白ださ云	ふからだよ
の教授中	ルとカанс
タクビし	立つの意氣な
た、	朝鮮迄引つく
か」	以てエライ、
タクビに附	大ならざる可
荷出の無	然るにカン
▲山田君や水	る者は居當國
原清東君や水	ル
千万位の人間	立つて居る
▲山田君や水	大だらけの
千萬位迄は行	立つて居る
▲山田君や水	大だらけの
で國つたもの	立つて居る
カバナの山の	立つて居る

「頭はシツカリして、  
した官學教授の中に、  
變物の硬骨漢だ、それだから大きかつたらしい。  
二人達が似た様なことはナヨと變に思つた、だから、  
爺さんた、年寄りに年寄りをせよ縁宜のよい話では、  
で始めて會つた、打了、  
妻の五分刈ウンボコ前髪の、  
ほめるが舞臺顔は堂々として、着て高座に上つた、  
る、然しどう見廻して、  
父物たが、僕の話はそ  
なたは年よりかも老は  
たしか青柳君はあるな  
な等だが彼はあの通り  
何時も若々しい」  
これに相違ば御座いませ  
した、七千萬と云ふま  
るめての話で成程志は  
からず、大凡政治家た  
家國民を双肩に擔つて、  
かる可からずだ、全  
スンの後から持前の皮  
と頭を持ち上げて來て、  
におへない、ヘン白髪  
千萬かそうすりや海  
僕など半白だから三四  
く勘定だ、中央線の西  
野龍君などは差向きさ  
奥でやる奴をツイ迂つ  
村君の爲めに辯解して  
僕に對すと返答は智  
此方を憂へて呉れぬの  
至はノロエヌテかノロ  
だ、

かり目をすつたも  
にくとも新聞記者に向  
たさは笑はせるよ、笑  
ら日本に歸つた時試  
格が無い様な口吻は  
人社會だして物笑ひ  
もわが軽く「俺が  
築が過ぎたので年よ  
官吏でなければ國家  
は人間だして物笑ひ  
たさは笑はせるよ、笑  
ら日本に歸つた時試  
格が無い様な口吻は  
人社會だして物笑ひ  
もわが軽く「俺が  
築が過ぎたので年よ  
十八の薔薇散る夜

した、カイビーラや浪人で鼻を括りも兼ねまわり爲し兼ねまいと見て内君をデモクヲチツクがあるがそれは眞赤な石し田付君がデモクラチックなノチックで我儘でお天氣爺で立つて居らぬ。の固りだ、

面では西園寺が役者を招いて雅宴を張る所でもデモクナチツクのが何ぞ知らん西園寺位守さ似たり寄つたりの、は二本差したサムライのが好きだからツイ平民ではない、而して我儘氣儘に育つたる、其が今でも少しも嗜み長唄を唄つたりして居らぬ。

めるから若い書記生ながら散することある、内ノチツクどこか伊勢の、雷の様にムカ腹ノヤンナヤな爺さんで、いヤンナヤな爺さんは、中一夕齊藤和君の宅で、長唄をやり始めた、するが如きが隣室でコジコイと云ふが道樂をしたゝと云ふが道樂をしたゝと云ふが道樂をしたゝ豚を絞める時の様な鳴子供なら泣く、それが障つたものではあるものの、デモクラチックと甚だ遠しと評せねば此流義で行くなら大天使が下僚の前だからもので、デモクラチックな調法なものでムカ腹をあつたる、となごの喜劇もあつたるはクロうと思れたるが持つ様なことはない、に持たれたりでは下僚のならば、それは西園寺未だある

## ◆最近電報◆

コロンビア産 四十弗

レジデンス ボルトアンダーラード

一四・五六二  
ベテルの外國語は得手ではなかつた。それでも翁獨特のボルトガル語

## ○英國婦人ご普選

労働黨選出議員ウキアム、アダムソン氏の提出に係る二十一歳以上の婦人に選舉権を賦與せんとする

の議案は下院に於て盛んに討議せられたるが投票の結果二百八十八對七

十二票の差にて第二讀會を通過せり該案實施の際に於ては婦人有權者は

男子のそれを超過すべし。

(倫敦電報)

## ○獨逸四港罷業

ハンブルグ、ブレーメン、ケーレン

びスラッセン四港の仲介人足は九時間勞動制の要求を拒絶され同盟罷業

を起せり。(倫敦發電)

## ○比律賓獨立運動

比島選出下院議員委員會は比律賓獨立に關する提案を全島選出上院議員に委任すべく決議せり尚大統領クーリッヂ氏は比島獨立の件に引き全委員会を引見せるが未だ兩者の協議を見

立にして最近の東京電報は公の容態の漸次恢復に向ひてあるを報せり

到らざり(華府發電)

## ○松方公未だ死なず

比島選出下院議員委員會は比律賓獨立に關する提案を全島選出上院議員に委任すべく決議せり尚大統領クーリッヂ氏は比島獨立の件に引き全委員会を引見せるが未だ兩者の協議を見

立にして最近の東京電報は公の容態の漸次恢復に向ひてあるを報せり

到らざり(華府發電)

## ○州統領選舉

別に反對黨の立候補ある譯でなく

聖州共和黨幹部で取極めたる次期州

統領候補者カーロスカンボ氏副統領候補者エルナンデスプレス氏を

選舉の形式に於て任命したる迄であるがそれでも三月一日の選舉日は公

休日として諸官廳銀行は休業し選舉は形の如く静穩裏に行はれたるが兩

氏の得票は左の如し

## ○州統領選舉

<p><b>CASA OKASIMA</b></p> <p>Caixa Postal 14 Est. C.Cezar Sorocabana</p> <p>日本各種 種子肥料 農產物 委託販賣</p> <p>岡嶋商店</p>	<p><b>Monção, f.Cezar</b></p> <p>食料品 雜貨品 農產物仲買 委託販賣</p> <p>水谷商店</p>	<p>T. VENDO Rua Conde de Sarzedas 23 S. Paulo</p>	<p>悲慘なる紀念 日本酒ふくむすめ 右少々着荷致しました品切れに ならぬ内御用命下さい 噴霧器ガエルデ・パリスの取次 資本も致します</p>	<p>時無大根 山東白菜 ボシ家庭樂を御備へ下さるハ時 期が參りました 小兒樂專門 血く道 下劑 胃腸藥の各種</p> <p>大慶吳質況寫真帖 大根(院大根) 送料 (キロ迄 レボーリヨ、セボーラ種 一ミル二百</p> <p>新着種物 廣告</p>
<p>Pensão <b>Popular</b></p> <p>丁寧 懇切 清潔 御旅館</p> <p>ナバレ町メルカード</p>	<p>GARAGE <b>NORMAL</b></p>	<p>業車勵自貸 Garage Congresso Praça João Mendes Telephone Central 81</p>	<p>サントス市グラツサ、デ、ジョ ゼーボニファシオ五十一</p>	<p>日光館 榮門松</p>
<p>Tel, Cidade 56 graça da Republica 43</p>	<p></p>	<p>◆ルミ八間時◆</p>	<p></p>	<p></p>
<p></p>	<p></p>	<p></p>	<p></p>	<p></p>

ひらた旅館 東京館 電話シダトヂ一四六七番  
主平田崎太郎  
パウル市クロカバナ驛眞上 柳木商店

日本雜貨 獨逸品各種  
賣樂、罐詰類、色々、玩具  
額面用ビードロ、額椽  
パウル市バチスター、ダ、カルバリオ一四番

東京館 電話シダトヂ一四六七番  
サンパワロ市ルア、コンデ、デ  
ルアマウワニ九一一番  
聖市ソロカバナ驛前

中矢商店 K.NAKAYA 電話セントラール六一三六番  
R. Conde de Sarzedas 69  
S. Paulo

東京館 電話シダトヂ一四六七番  
販賣書籍、化粧品、小間物、反物、罐詰、食料品、種子  
販賣藥、一切  
販賣小鉢強勉大 ▶

矢部洋服店 K.NAKAYA  
内國產絆節製造元  
古謝將義

成功館 内國產絆節製造元  
野口喜平治 電話二〇〇八番

新鮮でお美味しい饅頭煎餅あり祝宴用の御注文にも應じます  
聖市コンセレイロ、フルタード街一番(コンデ坂上)  
カルスゾノ兩驛よりの電車は三九番を御便宜ご致候

御旅館旭 古謝將義 電話セントラール三三四四

サントス市ラルゴセツテデセツランブロ一五

▲創一作  
或る男

(その一) ▲◆生

急に淋しさと限りない空虚を覺えた新吉は、ハモニカを手にする。さながらバスの方へと出て行つた。空は

一面銀砂粉を撒いて今しがた出たばかりの月が萬象を照して、しばらく

と邊りは音も無、唯かすかに夜鳥の鳴くが聞ゆるのみ。

彼は鳥小屋の傍の木株に腰を下した。そしてハモニカを口にする。さ心行く迄吹奏した。高く低く滅入

と様に…。牛は冷氣におびえてかしきりに彼

匹五をつんで居る。

彼は愈々吹きつのつた。かうして居る間が彼に取り最も樂しい否悲哀と痛恨を忘らる、時なのだ。

小一時間の後であつた。彼の背後に人の氣配がして立止つたのに気が付いた彼は、吹く手を止めて振返つた。それは主人の娘の静代であつた

湯上りの派手な湯衣に一寸薄化粧して新吉の目に映つた。吹く風は彼女の髪をなぶつて美しさを一層増し

て居る。

「相變らず吹いて在らつしやるのね」恥しさうに云つた。

「室屋に居ては蔭氣なもんですか

ら」「遠くで聞くとね、それは／＼好きがしてよ。そしてね、私其歌一曲甘へる様にもじ／＼して云つた。

「あ、そうでしたか」

彼は無難作に答へてそして反対の方の山へと目を向けた。

新吉の答へに物足らない様に、彼女はもじ／＼して居る。新吉は山を見ながら静代の姿を想像して見た。そして可憐しい此女性が可愛さうと思はれた。そして自分の態度がどん

なに彼女の心を亂させるかを思ふて

氣の毒にも感じた

林新吉が此の高橋家にカマラーダ

として雇はれて來たのは六ヶ月程前

で有つた。彼の活潑と眞面目さは主

人を喜はし、或る點に於て附近の人

々の尊敬も受けけて居た。主人と云ふ

力は日本で可成人々に知られた商人

であつたが一寸した手疎ひから失敗

を來し南米へんなりまで逃げる様に持たれていまし、鍵を握つたのは六年

前のことである。しかし南米にて

から幸運が續いて日本よりの親族の悲運の犠牲となつて、弟静男と共に

の悲運の犠牲となつて、弟静男と共に

立至つたのである。(つづく)

夕暮である

古い者のいた

夕暮である

本の間を傳はり

晩鐘の音は

萬象は薄明に包まれ

樹間の蔭は暗く

夕暮の裳を縫つて行く

不氣味な静寂が擴みて行く

どこかで

鬼火が燃えてるやう

空に星

古城の燈火の如く

古い謎めいた

光をさもしてゐる

見れば

町には黄金の河が

町を貫いて

新鮮な耀が

激潤として流れでる

燈火の河である

そこには

甘い七色の酒

唄と女

秘密な賭博場

自由な奔放な

享樂の交際がある

夕暮の妖氣は

四邊に漲つてゐる

魔女の脣の陰氣な

しかし艶めかしい

鬼火がトロ／＼こ

そらに燃えてるやう氣がする

自分の夢は未だ醒め切らない

便は鬱々として

さながら地上を古代の森に化し

身は妖魔の道にさ急ぐ

り係

投票歓迎

現行社會制度を打破せんければならん

故に僕等は先

市會堂假會堂

本當の自由は来る

夕暮である

古い者のいた

夕暮である

本の間を傳はり

晩鐘の音は

萬象は薄明に包まれ

樹間の蔭は暗く

夕暮の裳を縫つて行く

不氣味な静寂が擴みて行く

どこかで

鬼火が燃えてるやう

空に星

古城の燈火の如く

古い謎めいた

光をさもしてゐる

見れば

町には黄金の河が

町を貫いて

新鮮な耀が

激潤として流れでる

燈火の河である

そこには

甘い七色の酒

唄と女

秘密な賭博場

自由な奔放な

享樂の交際がある

夕暮の妖氣は

四邊に漲つてゐる

魔女の脣の陰氣な

しかし艶めかしい

鬼火がトロ／＼こ

そらに燃えてるやう氣がする

自分の夢は未だ醒め切らない

便は鬱々として

さながら地上を古代の森に化し

身は妖魔の道にさ急ぐ

り係

投票歓迎

現行社會制度を打破せんければならん

故に僕等は先

市會堂假會堂

本當の自由は来る

夕暮である

古い者のいた

夕暮である

本の間を傳はり

晩鐘の音は

萬象は薄明に包まれ

樹間の蔭は暗く

夕暮の裳を縫つて行く

不氣味な静寂が擴みて行く

どこかで

鬼火が燃えてるやう

空に星

古城の燈火の如く

古い謎めいた

光をさもしてゐる

見れば

町には黄金の河が

町を貫いて

新鮮な耀が

激潤として流れでる

燈火の河である

そこには

甘い七色の酒

唄と女

秘密な賭博場

自由な奔放な

享樂の交際がある

夕暮の妖氣は

四邊に漲つてゐる

魔女の脣の陰氣な

しかし艶めかしい

鬼火がトロ／＼こ

そらに燃えてるやう氣がする

自分の夢は未だ醒め切らない

便は鬱々として

さながら地上を古代の森に化し

身は妖魔の道にさ急ぐ

り係

投票歓迎

現行社會制度を打破せんければならん

故に僕等は先

市會堂假會堂

本當の自由は来る

夕暮である

古い者のいた

夕暮である

本の間を傳はり

晩鐘の音は

萬象は薄明に包まれ

樹間の蔭は暗く

夕暮の裳を縫つて行く

不氣味な静寂が擴みて行く

どこかで

鬼火が燃えてるやう

空に星

古城の燈火の如く

古い謎めいた

光をさもしてゐる

見れば

町には黄金の河が

町を貫いて

新鮮な耀が

激潤として流れでる

カルナバル祭

▲ 雜報

最終日の大賑ひ  
二日から始つた本年のカルナバルは危なかしい天氣模様の上に米やフェジヨンが馬鹿に高い所から景氣の屋も如何かと危まれたが流石に當夜にいつてみると人出が多く近年に至る市の人口が一足飛びに七十三万餘にもなり自動車も六千五百臺を超えてるので自動車の行き交ふ數は去年よりも多かつた、バスの大通りは三キロメートル餘に亘つて両側にイルミネーションを施し入口には州統領萬歳市長萬歳を大文字で書き出しに氣勢を揚げて居た其代りアベニーダバウリスタの方は今年からイルミネーションを廢止して畫面だけの香水合戦セルベンチナ合戦に止めたのみで聖市のカルナバルも次々に下町に移轉する傾向が見える。

火事が祟つて

昌蹄もは／朝の五時過ぎるまで

三日目は説向さ

スに出来たと領館出張所には

従来餘り聞いことの無い名稱である

が出来たと領館出張所では

前日に増して煮え返る様な景氣此日又は事件の起きたたびにサンバウロは

は晚方から流石に人出が多く各電車

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

の上天氣でパクリスターは正午過ぎから自動車が一杯になり往復四列でアーダルイスアントニオから出張所長はサントスに常住すべき

前日に増して煮え返る様な景氣此日又は事件の起きたたびにサンバウロは

は晚方から流石に人出が多く各電車

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

の上天氣でパクリスターは正午過ぎから自動車が一杯になり往復四列でアーダルイスアントニオから出張所長はサントスに常住すべき

前日に増して煮え返る様な景氣此日又は事件の起きたたびにサンバウロは

は晚方から流石に人出が多く各電車

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

の上天氣でパクリスターは正午過ぎから自動車が一杯になり往復四列でアーダルイスアントニオから出張所長はサントスに常住すべき

前日に増して煮え返る様な景氣此日又は事件の起きたたびにサンバウロは

は晚方から流石に人出が多く各電車

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

の上天氣でパクリスターは正午過ぎから自動車が一杯になり往復四列でアーダルイスアントニオから出張所長はサントスに常住すべき

前日に増して煮え返る様な景氣此日又は事件の起きたたびにサンバウロは

は晚方から流石に人出が多く各電車

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

の上天氣でパクリスターは正午過ぎから自動車が一杯になり往復四列でアーダルイスアントニオから出張所長はサントスに常住すべき

前日に増して煮え返る様な景氣此日又は事件の起きたたびにサンバウロは

は晚方から流石に人出が多く各電車

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

の上天氣でパクリスターは正午過ぎから自動車が一杯になり往復四列でアーダルイスアントニオから出張所長はサントスに常住すべき

前日に増して煮え返る様な景氣此日又は事件の起きたたびにサンバウロは

は晚方から流石に人出が多く各電車

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

ければ出入りさせないプラス方面は

は終點迄逆行せぬシダーデに出ら

</

